

第3回 11月7日(金)

「イタリア北東部の諸言語と辞書 ―地方少数言語を記述する―」

講師：山本 真司 東京外国語大学外国語学部言語・情報講座欧米第二課程准教授

イタリアの社会言語学的状況の特徴付けるものは、おびただしい数の地域的言語、ローカルな言語現実の特徴であり、その活力である。

イタリアにおいて、「イタリア語」は、もともとトスカーナ地方の方言が、ごく一部の、知識人の階級の間で、共通の、文学およびビューロクラシーの言語として受け入れられるに至ったものである。その広範囲な普及はごく最近、20世紀になってようやく達成されたものである。

一方、各地方には、共通語の普及以前から存在していた、その土地の言葉が存在する。これは、その地方とイタリアの「主流の」文化との言語的・社会的関係に応じて、「方言」「局地的言語」「少数言語」などと呼ばれる。ごく簡単にいうと、「方言」よりも「少数言語」と呼ばれるほうが、イタリア文化からの距離が遠いとみなされていると言える。

このような区別は、一般の人々の意識とは必ずしも一致しない、社会的に指導権を握る階級の意向で決まる傾向があるので、先祖代々ただ淡々と日常の生活をしてきた人々が、政治体制の都合で、突然、「異人」扱いされたり、自分の意思とは関係なしに「あなた方はイタリア人だ」と言われたりする、という悲喜劇が起こる。

それはともあれ、これらのローカルな言語現実も、それぞれ（共通語の世界とは確かに異なる）一個の言語であるから、それを辞書や文法書に記述しようという人が出てくるのは、ある意味では当然といえる。こうして、すでにおびただしい数の方言の辞書・文法書が既に存在するが、さらにこれからも出てくる模様である。

イタリアは、特に北イタリアは、(残念ながら地方の元気がだんだんなくなってきている日本のような国とは異なり) 総じて地方文化を大切にす国なので、ある程度の重要性を持つ地方の中心都市・中核都市に関しては、注意深く探すと、たいてい、この種の方言辞書・文法書が、詩や演劇、時には小説やエッセーなどのテキストとともに、存在しているのを見出すことができる。

イタリア旅行で、時間の余裕があったら、どこか県庁所在地規模の大きさの町を選んで途中下車してみよう。少し大きな本屋に入って、店の人に「この町の方言について知りたいのだが」と言えば、(保証はできないが) 喜んでいろいろな本を紹介してもらえらるだろう。

辞書と文法書を片手に、適当な量のテキストを読んで勉強し、「ネイティブ・スピーカー」に発音の手ほどきをしてもらえば、そのナントカ町のナントカ語で話せるようにさえなるだろう。基本的に、英語やフランス語を勉強するのと、そう変わらない。

また、もし、あなたが言語学者ならば、古典から最新のものまで、あらゆる理論を試してみることでできるもう1つの言語を、手に入れたことになる。そのような言語が何十・何百とあるのだから、研究のテーマは数限りなく転がっていることになる。方言研究が、しばしば、若い人の研究者デビューの第一歩として、あるいは、老後を有意義に過ごす活動として、勧められるゆえんである。